

The 12th study workshop of NPSA Shiga 2024

滋賀大学保健管理センター健康セミナー

ニューロサイコアナリシスの源流再訪

ー再び『神経精神分析入門』をめぐってー

岸本寛史（静岡県立総合病院）、田中琢真(滋賀大学データサイエンス学部)、
成田慶一（京都大学医学研究科）、久保田泰考（滋賀大学）

2024年7月27日(土)15:30～17:30 ハイブリッド開催、参加無料

滋賀大学大津サテライト

(現地参加希望はyka@edu.shiga-u.ac.jpまでご連絡ください)

zoomリンク

<https://shiga-u-ac-jp.zoom.us/j/82820131136?pwd=rNacbc7tz1mSmMj73t81LaCRiwzPUo.1>



ご案内:『神経精神分析入門』（青土社 2022年）Clinical studies in Neuro-Psychoanalysis (Karen & Mark Solms, 2001)、失語症の症例へのニューロサイコアナリティカルなアプローチを扱った書物が、私たち研究グループの岸本寛史先生によって翻訳されました。昨年度に引き続いてこの豊かな書物について参照しながら、古くて常に新しいニューロサイコアナリシスの源流に置かれた問いー私たちは言語を使う機械なのか、そのことは私たちの意識とどう関わるのか？ーについて思索を巡らせたいと考えます。

開催によせて

Chat GPTに代表される大規模言語モデルと対話すると、これには既に意識を獲得しているのではないかと思えることがあります。しかしAIは、例えばタイプライターが単語やその一部の文字列の連なりから文を生成することと同じような過程において、単に次に来る語を確率的に予測するだけのはずで

ある語をある点座標で表せば、意味ネットワーク上の別の語(座標)とのベクトル距離が計算されます。その各点の距離で示されるのが、語の意味であり、私たちが日常的にある言葉を使うことは、これまでにヒトによって話されたその言葉についての使用データに基づいて、AIが解像度を少し下げたイメージを出力することと結果的には区別できないようです。もちろん、そのようにモデル化すれば、AIは私たちの言葉遣いに限りなく近づくということであって、本当にそのように「無意識」が計算しているかは謎です。

しかしそれゆえに、フロイトがかつて行ったように、健常者の言い間違いから失語症にいたるまでのエラーデータとしての病理学的現象から、無意識の計算機構を推測することは、今日も科学的妥当性をいささかも失っていません。フロイトは『無意識』(1915)という論文において、次のように書いています:

「無意識(Ubw)システムの核は欲動の諸表象から成り立っており、それは欲望の動きとして、備給を放出しようとする」

Der Kern des Ubw besteht aus Triebrepräsenzen, die ihre Besetzung abführen wollen, also aus Wunschregungen.

無意識の「欲望の動き」Wunschregungenとみえるものは、欲動そのものではなく、「欲動の諸表象」Triebrepräsenzenによってのみ意識にもたらされるのであり、そうした言語的な表象を扱う機能の障害は、逆に無意識へと言語のみから接近する精神分析的なアプローチを取る臨床家にとって、常に新しい可能性と挑戦への扉を開いてくれるでしょう。

滋賀大学保健管理センター

久保田泰考